

# アイヌ文化と観光土産

## 展示実践がもたらす多様な再文脈化

山崎幸治（北海道大学）

本発表では、発表者が2015年から2018年に関わった昭和期の「アイヌ」をモチーフとした観光土産に関する5つの展示実践のなかで得られた知見について報告する。

アイヌの物質文化史を概観した際、自らが使用する物に加えて、アイヌ社会の外を意識した物作りをおこなってきた歴史は少なくとも江戸時代後期まで遡る。そこでは、茶托、筆立て、手拭い掛けなどが製作され、蝦夷地に滞在する幕吏や商人の手に渡ったことが知られている。それらは「蝦夷細工」などと呼ばれ、本州の文人や茶人などに愛玩された。収集年代が特定できる世界最古のアイヌ・コレクションのひとつである長崎出島に滞在したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト収集のアイヌ・コレクションも、このようなアイヌ社会の外を意識して製作された品々によって大部分が占められている。これらは、のちの「観光土産」の萌芽と見ることができる。

明治期には、すでにアイヌの工芸技術によって生み出された品々が、北海道を特徴づける産業となる可能性が模索されている。大正期に入ると、徐々に北海道への観光旅行が盛んとなり、八雲や旭川では木彫り熊が作られはじめた。

昭和30年代ごろからは「北海道観光ブーム」とよばれる旅行ブームが生まれ、日本全国から多くの観光客が北海道に押し寄せた。観光地では、伝統的な工芸品や木彫り熊に加えて、北海道を象徴するイメージのひとつとして「アイヌ」をモチーフとする観光土産が大量に作られた。その作り手はアイヌに限定されないが、多くのアイヌもその一部を担っていた。現在、プロとして活躍するアイヌ工芸家の多くが、このブームのなかで木彫りや織りを学び、腕を磨いたと語っている。

今回、発表者が展示をおこなったのは、この昭和30年代から盛り上がりを見せた「北海道観光ブーム」のなかで生み出された観光土産である。ニポポ人形、木彫り熊、人物の横顔や鮭などのレリーフが代表的なものとして挙げられるが、その種類は多岐にわたる。展示した品々は、発表者の実家にあった個人コレクション約350点である。これらの品々は、発表者の両親が、すべて北九州地域（福岡県）の骨董店や蚤の市において収集したものであり、本人達が北海道旅行の際に購入したものではない。北九州からの旅行者が北海道で購入し所有していた物が、何らかの理由で売りに出され、中古市場に出回ったものである。

**キーワード** アイヌ、展示、土産、観光、ツーリスト・アート

筆者は、これらの「アイヌ」の観光土産を、下記に挙げる場所において展示した。

### ■『木と生きるーアイヌの暮らしと木の造形』

2015年8月29日～10月18日（入間市）

2015年11月19日～2016年1月24日（旭川市）

主催：（公財）アイヌ文化振興・研究推進機構

会場：入間市博物館／北海道立旭川美術館

### ■『昭和レトロ アイヌのお土産大集合』サテライト企画展

2016年3月26日～5月13日、6月6日～10月31日

主催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター/阿寒湖アイヌシアター運営協議会。

会場：阿寒湖アイヌコタン アイヌ文化創造伝承館

### ■『二風谷、昭和おみやげ物語』サテライト企画展

2017年6月10日～7月9日

共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター(主管)/平取町立二風谷アイヌ文化博物館

会場：二風谷工芸館

### ■『「アイヌ」のモノとイメージ』

2017年8月4日～（開催中）

主催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター

会場：北海道大学総合博物館 当センタースペース

### ■『旅する木彫り熊 -アート・ツーリズム・境界』

2017年3月4日 ※セミナーイベント展示

主催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター境界研究ユニット/北海道大学アイヌ・先住民研究センター

会場：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

展示では、それぞれ開催地独自のコンテンツと組み合わせで実施した。その対象も地域のアイヌコミュニティに向けたもの、観光客に向けたものなど、同じモノを展示しつつも、複数の文脈のなかに位置づけるものであった。同時に、そこでは当初予想していなかった再文脈化がそれぞれの場所でおこった。その多くは、実際にそこにモノが存在しているからこそ生まれたものであり、モノを出発点として、これまでほとんど語られてこなかったアイヌの工芸史や現代史を呼び出す力を持っていた。本発表では、複数の再文脈化のなかで観光土産を通して見出された新たな可能性の一端について報告する。